「予科練」第475号　令和5年3月1日発行〈隔月奇数月1回，1日発行〉昭和53年7月26日　第3種郵便物認可

予科練

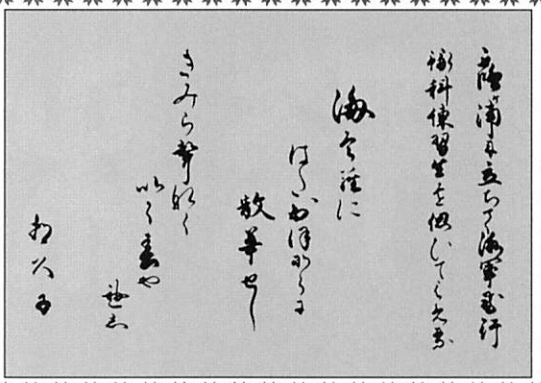
No.475　令和5年

3・4月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.18… 2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》…… 3
○第56回予科練戦没者慰霊祭のご案内…… 4
○茨城の戦跡紹介③…… 5
○運・鈍・根…… 7
○三四三空隊史⑰…… 9
○ああ運命の九〇一海軍航空隊②……13
○さらば予科練⑨……16
○華々しき戦闘の蔭に……19
○雄翔館見学者所感……21
○海原会寄付者芳名簿・事務局日誌……23

公益財団法人　海原会

無断転載を禁ず



高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行予科練習生を偲びてよめる

海はらに
はたおほそらに
散華せし
きみら声なく
いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑　P基地の碑　No.18

P基地とは、呉港外倉橋島大浦崎に新設された「甲標的」の秘密工場で、呉海軍工廠大浦崎分工場の隣に新設された水中特攻兵器搭乗員訓練基地であった。

指揮官は、ハワイ真珠湾攻撃に「甲標的」を発進させた「伊16潜」艦長の山田薫中佐で、搭乗員、講習員士官、下士官など一五〇名位の小部隊であった。その後、予備学生、予科練出身の搭乗員が飛躍的に増加した。これにより昭和十九年七月十日、第一特別基地隊に改編、司令官長井満少将（兵45）に幕僚を配して本格的に訓練が行われるようになり、大浦突撃隊（司令池沢政幸大佐）となり、約二千名の大部隊となった。

大浦基地で教育訓練を受けて、「甲標的」で出撃散華した英霊四三一名の戦没者、殉職者を慰霊顕彰するため特殊潜航艇関係者の間で、建碑が発議され、各方面の協力により「この碑」を建立した。

●所在地　広島県音戸町波多見
八幡山神社境内
●建立年月　昭和四十五年八月二十二日
●揮毫　清水　光美氏（海軍中将）
●慰霊祭　毎年五月二十日前後の土曜日
●問合せ　特潜会
港区虎ノ門一―二―一六（渡辺ビル
吉沢㈱内（〇三―三五〇一―〇五八二）

海軍飛行豫科練習生

遺書　遺詠　遺稿　辞世

遺書

海軍一等飛行兵曹　高橋文雄

第十期甲種飛行予科練習生

この手紙を見られる父母の心境を思うとき、唯一人の男子として何一つ成し得なかった事を深く悔やみ、そして我儘な生涯を了えることに対して、只管お詫び致します。

生を享けて二十歳、若くして散り行く私は、唯、なし得るところ無き身が、大君の御楯として少しでもお役に立って、死すべきときに死して行くこの幸福が胸に迫ります。大空、南海の果てしなき空で、敵と相共に火の華と化し、死んだと思って下さい。

忠なれば孝なり、嗚呼、大日本帝国に生まれ、海軍搭乗員として死す。自分は何と幸福ぞ、文雄は喜んで死んで行きます。椰子の葉陰で南十字星が瞬いています。緑に赤そして青く、御母様の愛情のように、今日になっても未だ消え去らぬ。

積雲、今度の戦いがひしひしと迫ってくる。決死、必死、一心全霊、最早私は私ではありません。仇なす者への必殺の身として体当たりで行きます。

みんなみの　雲染む果に　散らんとも
くにの野花と　我は咲きたし

父上様、母上様、邦子（妹）お大夫で。
皆様の御幸福を祈りつつ。

昭和十九年十月二十二日
第二〇一海軍航空隊　零戦にて比島東方洋上で敵機動部隊に自爆戦死。

第56回予科練戦没者慰霊祭のご案内

一　偲ぶ集い

日　時　令和五年五月二十七日（土）午後六時開宴

場　所　ホテルマロウド筑波
（土浦市城北町二―二十四）
TEL　029―822―3000

会　費　六千五百円／一名

二　慰霊祭

日　時　令和五年五月二十八日（日）雨天決行
午前十一時（受付九時開始）

場　所　雄翔園　陸上自衛隊土浦駐屯地武器学校内
（茨城県稲敷郡阿見町青宿一二一の一）

※　受付場所：予科練平和記念館横広場

送　迎　今回から、専用バスによる送迎はありませんのでご注意ください。

移　動　関東鉄道バス（阿見中央公民館行）またはJRバス（江戸崎行）をご利用ください。

乗車バス停
JR常磐線土浦駅西口バスターミナル①番乗り場

降車バス停
関東鉄道バス　阿見坂下
JRバス　阿見（阿見坂下と同じ場所）

会　費　参加者　三千円／一名（ご同伴者同額です。）
（会費はお弁当代及び慰霊祭実行のための諸費用として使用させていただきます。）

三　宿泊希望者（宿泊日　五月二十七日）

宿泊先　ホテルマロウド筑波
料金　六千四百円／一名（朝食付き）
（定員を超過した場合は、偲ぶ集い参加者を優先させていただきます。）

四　参加申し込み方法

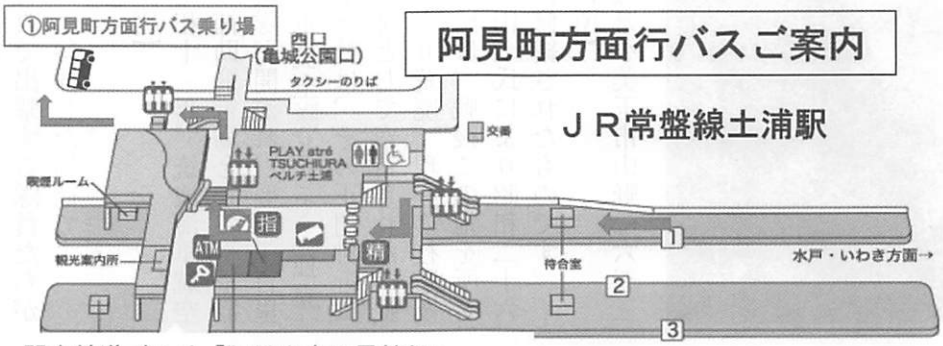
※　慰霊祭等の参加及び宿泊を希望される方は、機関誌同封のハガキにより申し込みをお願いいたします。
ご参加等を希望される方のみ、本機関誌同封の返信用はがきに所要事項をご記入の上、切手は貼らずに四月二十六日までにご投函ください。

※　慰霊祭では直会は行いません。式典終了後にお弁当を配布いたしますので、指定場所にて各人ごと個別に喫食をお願いいたします。

五　お詫び

コロナ禍によりホテル利用料金が上昇した事を、お詫び申し上げます。コロナの感染が拡大し会場への入場人員数の制限や会場そのものが使用困難となった場合には、中止または規模を大幅に縮小しての開催となる場合もありますので、ご了承ください。

連絡先　「第五十六回予科練戦没者慰霊祭実行委員会」
電話　029―886―5400



●関東鉄道バスは「阿見中央公民館行」
　ＪＲバスは「江戸崎行」にご乗車ください。

●慰霊祭会場最寄り降車バス停は
「阿見坂下」又は「阿見」です。
（関東鉄道バス）　（ＪＲバス）

慰霊祭会場は、「阿見坂下」又は「阿見」で降車し徒歩２分の場所です。

バス時刻表

関東鉄道バス（阿見中央公民館行）	ＪＲバス（江戸崎行）
07：05	07：47
07：30	08：00
08：05	09：10
08：20	10：35
08：45	
09：15	
09：45	
10：15	

茨城の戦跡紹介③

海原会参与　行方　滋子

今回は、茨城空港（百里基地）の近くに残されている「百里原海軍航空隊」の戦跡を紹介します。

百里原海軍航空隊は、筑波海軍航空隊の分遣隊として、昭和十四年十二月に実用機専修、練習機専修の目的で開設されました。予科練生の訓練も行われ、末期には特攻隊が編成され、沖縄方面の特攻作戦に従事しました。終戦後、部隊は解隊され、海軍跡地は農地として開放されました。

①　航空隊の門柱

航空隊の正門で、大谷石の門柱と鉄筋コンクリート製扉を見ることができます。門柱は九十三×九十三センチ、高さ二二五センチ、門柱と門柱の間は二二五センチです。

また、私が訪れた時は、夏真っ盛りで草木が生い茂っていたため、正門跡に建立されている石碑を近くで見る事はできませんでした。

石碑には、「真心國柱　昭和二十年八月十五日記念」と揮毫されており、建立されたのは、昭和五十二年二月ですが、詳細は不明です。

（茨城県小美玉市山野）

②　百里神社

百里原海軍航空隊の守護神として鎮座されたのが始まりの神社です。

御祭神は、天照大神です。かつては、基地内にあった神社ですが、現在は①の航空隊

の正門跡の近くに鎮座しています。

特攻で出撃する隊員たちが最後に参拝した神社です。

【由緒】

昭和十三年、筑波海軍航空隊の補助飛行場として百里原分遣隊が開かれ、翌年、百里原海軍航空隊として、独立。百里神社は、その正門付近に守護神として奉斎されたが戦禍により荒廃。現在の社殿及び鳥居は、戦後この地を所有した田上氏により昭和二十六年に修繕されたものです。

【住所】

茨城県小美玉市山野一六五三

○ **百里神社の鳥居**

コンクリート製の鳥居で、鳥居の柱下部の藁座（わらざ）や台輪（だいわ）の部分が百里ヶ原飛行場に配備されていた九九式艦上爆撃機のような固定式のランディングギアを装備した飛行機の車輪部分を覆う『スパッツ』といわれる空力パーツを模した形となっています。

○ **百里神社社殿**

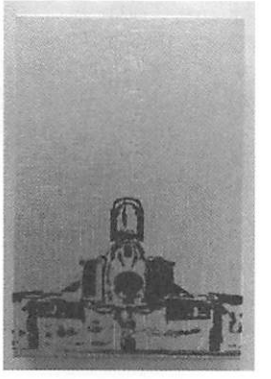
コンクリート製・瓦葺、鉄の扉は固く閉じられています。

○ **百里神社の御朱印**

同じく小美玉市に鎮座する素鵞神社（そがじんじゃ）で授与いただけますので、百里神社の参拝を終えたあとに素鵞神社に向かいました。百里神社の御朱印には、F―4ファントムが描かれています。

また、百里神社整備事業の奉賛も募っており、一口五千円ですが、「特別御神札一体」と「特別御朱印帳一冊」をいただくことができます。

③ **謎の戦跡**（煉瓦造りの建物）



農家の敷地内にある戦跡です。車でさまよっているときに偶然見つけることが出来た建物ですが、小美玉市の調査によると、長波方位測所跡、防衛研究所収蔵資料の航空隊配置図によると、光学兵器整備場ではないかということです。

未だにここまで残っているのは珍しく、戦争を伝える上

で貴重な戦跡です。
（茨城県小美玉市山野）

【沿革】
○昭和十四年十二月一日
筑波海軍航空隊百里原分遣隊より独立し開隊
○昭和十五年四月一日
操縦練習生五十三期入隊
○昭和十七年入二月頃
第八期海軍甲種飛行予科練習生入隊
○昭和十八年入二月頃
艦上爆撃機・艦上攻撃機の慣熟訓練教程追加
○昭和十九年六月頃
太平洋上哨戒任務を追加
・十月一日
桜花訓練隊として第七二一海軍航空隊を開隊
・十一月七日
七二一空は神ノ池飛行場に転出
○昭和二十年
・二月十六日
関東に敵機動部隊襲来
・三月頃
第六〇一海軍航空隊が進出
・三月三十日
飛行教育凍結
・四月二十一日
神風特別攻撃隊「正気隊」を編成、串良飛行場に進出
・四月二十八日
「菊水四号作戦」実施。第一正気隊二機出撃、二機消息不明
・五月四日
「菊水五号作戦」実施・第二正気隊二機出撃、二機消息不明
・五月五日
十一連空解散、第十航空艦隊直卒に改編
・五月十二日
第三正気隊単機で出撃、消息不明。これをもって正気隊の特攻作戦終了
・八月三日
第十航空艦隊第十五連合航空隊を新編、転入
・終戦後解隊

【百里基地の歴史】
終戦後、海軍跡地は農地として開放されましたが、一九五五年に地元から基地誘致運動が起こり、一九五八年に航空自衛隊百里分屯基地が発足しました。その後、五期にわたり滑走路工事が行われ、一九六五年には飛行場が完成。百里管制隊、百里気象隊、百里救難隊、百里警務隊、そして、第二〇六飛行隊（F―一〇四）及び二〇七飛行隊（F―一〇四）が新編され、一九六六年七月に、百里基地として正式に発足されました。

【参考文献】

◆防衛省・自衛隊
◆学び・調べ・考えよう
茨城県の戦争遺跡　伊藤純郎　編
◆百里を語る会（第七回報告）
◆茨城新聞（二〇二〇年八月）
この地を飛んで戦後七十五年戦争遺構を行く

◆素鵞神社
茨城県小美玉市小川古城一六五八番地一

運・鈍・根

特別会員　多田野　弘

運、鈍、根の運とは、巡り合わせとか予想外の吉凶禍福の出来事をいい、鈍とは、粘り強く続けて止まらないこと、根とは、根気と根性の気力をいう。

これをどう考えるかは、私たちの人生を通した命題の中で大きな比重をしめている。ゆえに、運、鈍、根の三つが人生に大きく関わっているのは、皆十分弁えていることである。しかし運は、自ら与り知らぬ天命のようなものだが、鈍と根は自分がつくり出すものという違いがある。

普通は、運命を「決まりきった人生の予定コース」で、動かすことができないもののように解釈しているが、宿命のように固定的ではなくて可変的である。

つまり、運命をどう受け止めるか、その受け止め方と対処の仕方によって、どのよう

にでも変えられる。運命は天の配剤であるとともに、自らつくるものと考えるなら、運命はどうにもならないものではなく、私たちの修養によって変化させ、創造し得るものといえる。

誰でも、不幸や災難に遭えば、「どうして私だけがこんな酷い目に逢わなければならないのか」と、運命を呪うだろうが、それは間違っている。病気になる、盗難に遭う、怪我をするなどのすべては、予め私たちの生活の中に織り込まれていて、それなしには生きることはできないのではないか。ならば、それを嘆くよりも、平然と受け入れ、冷静に対処した方がどれほど賢明かしれない。

運命はその素材を与えるだけで、それを私たちの責任においてプラスにもマイナスにもできる。運命より強いのは人間の精神である。何かが起こった時の私たちの対応の仕方を全く違ったものにするからだ。いいことばかり起こるものではないと、運命の全てを肯定することである。それは無力の諦めでも、戦いの放棄でもない。苦しくとも、それは丁度、自分にとって必要だったことのように受け容れるのである。

運命には指一本逆らえないと思ってしまえば、人間は運命に操られるロボットと化し、人間の自主性や主体性、自由をなくしてしまう。人間は運命を創るからこそ存在理由があり、そこから自由や主体性、創造性が生まれる。

私の人生は、運命に叩かれ、鍛えられ、苦しむことがなかったら、形成できなかった。青年期の3年間に過ごした過酷な戦場の体験から、運命をどう受け入れればよいかを学ぶことができた。必ずやってくる逃れられない死の運命を、進んで受け入れた瞬間、解放された自由と、計り知れない大きな精神的支柱を得られたように思う。勇気を百倍にしたのである。あの辛く悲しい惨めな思いは二度と味わいたくないが、運命とはそういう選択不可能な出来事なのである。

不思議にも、好ましくない、避けたいと思う運命ほど、貴重な教訓を含んでいる。反対に好ましいと思う運命には、得るよりも失うものが多いことに注意が必要だ。自分に降りかかった不運を呪う気持ちを捨て、わが身に起こるすべての出来事には必ず意味が含まれており、自分に必要だから与えられたのだと受取るならば、人間として大きく成長できるのではないか。

私は、人生には無意味なもの、無価値なものは何一つないと確信している。挫折も失敗も、病気も失恋も、プラスにできるからだ。それには、どんな運命に遭おうとも、自分を教育する種は必ず見つかるのだと考えることである。運命は予測できず、例え幸運であっても、有頂天にならず、不運にあっても悲しむことはない。「人間万事塞翁が馬」の例えのように、幸運の裏に災いの種が潜んでいるし、不運と思われる中にも、幸運の種が隠されている。

フランスの哲学者ベルクソンは「人間というものは、自分の運命は自分でつくっていけるものだということを、なかなか悟らないものである」と述べており、哲学者、西田幾多郎も「環境（運命）によって人間は変えられるが、人間は環境（運命）をつくることができる」と述べている。もし私達が、どんな過酷な運命も引き受ける気になるならば、私が、死の運命を受け入れた時に勇気が湧いたように、やり遂げる勇気が湧いてきて、鈍と根を創り出すのは間違いない。かくして、運・鈍・根は私たちの人生を悔いないものにせずにはいない。

最近、死が迫りつつある私は、励ましの言葉を聞いた。E・キューブラ・ロス著「死、

それは成長の最終段階である」の1節に「死についての一般的な概念からは、成長する見込みは含まれていないが、死を違った視点から見れば、人間を成長に導くのは、人生のいかなる他の力よりも、死が迫りつつあることと、死までの過程を経験することである。不思議に思われるかもしれないが、成長するための最も有効な方法は、死を研究し、死を体験すること」とある。

またこのようにも述べている。「戦争中多くの死の悲劇に巻き込まれた人々は、その時の情景や感情を決して忘れまい。その辛い経験を通して、他の手段で殆ど得られない成長と人間性を獲得している」とある。これはまさに、私が体験を通して得た考えであり、言いたいことを見事に表してくれている。百二歳の今が私の人間的成長の最高の機会であるのを知り、大いに意を強くしている。粘り強く気力をもってさらに成長したい。

三四三空隊史⑰

追憶の記

戦闘四〇七飛行隊長
故　林啓次郎少佐
〃　分隊士
故　上島逞志少佐
〃　分隊士
故　大塩貞夫少佐
〃　分隊士
故　石塚光夫中尉
〃　隊員
故　多見政行飛曹長
〃　隊員
故　成瀬一丸飛曹長
〃　隊員
故　久世龍郎上飛曹
戦闘三〇一飛行隊長
故　菅野　直中佐
戦闘七〇一飛行隊分隊長
故　木下一周少佐

諸兄の御霊の御前に、慎んでこの一文を捧げます。

服部　敬七郎（四〇七）

祖国の風雲急を告ぐる昭和二十年四月、ボルネオのバリックパパンに展開していた林啓次郎大尉を飛行隊長とする戦闘六〇二飛行隊（第十三航空艦隊摩下第三八一航空隊所属）は、「直ちに沖縄作戦に参加のため九州地区に集結せよ」との命令を受領した。赤道直下のこの地は、今日も真っ赤な太陽がマカッサル海峡の彼方から顔を出す。また暑くなるだろう。天地自然は昨日と全くなんの変わることもなく運行を繰り返している。

戦闘六〇二飛行隊

そもそも戦闘六〇二飛行隊は、昭和十九年二月愛知県豊橋基地で編成された。海軍で使用する燃料の大分部を供給しているバリックパパン製油所（ボルネオ東海岸中央部に位置している）の防衛と、南西諸島およびニューギニア方面に展開する部隊への物資・兵員・兵器・弾薬輸送船団の上空直衛、そして島づたいにごり押ししてくる米軍の前進基地を攻撃する任務をもって行動していた戦闘機隊である。当時零戦六十機、雷電二十五機、搭乗員百二十余名を有する精鋭部隊であった。

〈所属と編成〉
第十三航空艦隊
長官　福留　繁中将
第三八一航空隊
司令　中島第三大佐
飛行長　黒沢丈夫少佐
戦闘六〇二飛行隊長
尾崎貞雄大尉
（尾崎大尉戦死後）
林啓次郎大尉
〃分隊長　服部敬七郎大尉
〃分隊士　木下一周中尉
〃　内山敬三郎中尉
〃　上島逞志中尉
〃　上平啓州少尉
〃　岩本一夫飛曹長
他十余名
〃隊員　久多見政行上飛曹
〃　成瀬一丸一飛曹
〃　久世龍郎二飛曹
他百二十余名

第十三航空艦隊麾下の飛行機隊は、展開先より続々と、シンガポールのセレタ基地に集結して来た。命令受領の翌日昭和二十年四月二十八日には全機集結を完了した。

翌二十九日天長節を祝い、宮城を遙拝、天壌無窮を祈念する。式後第一陣四十機は砂塵を巻いて離陸、九州基地に向けて飛び立った。第二陣林大尉指揮の三十機、第三陣は私の指揮する三十機、さらに四陣、五陣と一日間隔をおいて順次発進するのであった。第十三航空艦隊麾下の全飛行隊は南方地域から姿を消すことになる。

隊長林大尉は明日出発である。私はその後の出発である。これがシンガポールの見おさめになるかも知れない。今日はシンガポール見物をしようということになった。小学校の時の遠足に出かけるようなはしゃぎかたである。隊員一同バスに乗り込む。ジョホール州のサルタンの豪荘な邸と、その石の門の前で昼寝する乞食、まことに好対照である。シンガポール攻撃の激戦地ブキテマの丘に建てられた忠魂碑に参拝する。

過ぐる昭和十七年二月、かの有名なる山下奉文兵団が、不落を誇るシンガポール要塞に対し、ジョホール水道を強行渡河し猛攻激戦のすえ、遂に陥落させたという所である。幾千の将兵の血を吸ったブキテマの高地に立ち、感無量、生きて再びこの地を訪ずれることは恐らくないであろう。数機の呑竜爆撃機が猛烈な爆音を轟かせて飛び去る。思えば長い長い十ヶ月であった。

バリックパパン基地の思い出

私は十九年六月、バリックパパン基地に展開している戦闘六〇二飛行隊に分隊士として着任した。隊員に聞くと「時々敵の偵察機がやってくるので、緊急発進で邀撃する」ということである。いよいよ第一線の戦場に来たのだ。

昭和十九年九月に始まったバリックパパン製油所に対する、敵戦爆連合の大編隊二百機と、これを邀撃する戦闘六〇二飛行隊零戦六十機、雷電二十五機、スマトラのサバン基地より応援にかけつけた零戦四十機（サバン戦闘機隊）、計二百五十機がマカッサル海峡上空において激突したのである。初回の空襲はB—24爆撃機約八十機であった。護衛戦闘機なしのはだかの来襲であり、敵に甚大なる損害をあたえ、十機以上を血祭りに上げて凱歌を奏した。味方には一機の被害もなく、敵機は製油所に突入できずに退散した。

第二回目の来襲は四日後にあった。敵は損害の大きなことに対応し、戦闘機P—38とP—47を数十機随伴しての戦爆連合二百余機の大編隊をもって襲いかかって来たのである。邀えうつ戦闘六〇二飛行隊、サバン戦闘機隊は万全の守りを展開し、製油所には被害がなかった。しかし飛行隊長尾崎貞雄大尉は戦死、内山敬三郎中尉はB—24大編隊の最先頭を飛ぶ総指揮官機に体あたりを敢行し壮烈なる戦死を遂げられた。製油所の北方百キロ米、四千米の上空であった。日頃猛訓練の背面直上方攻撃をする戦闘機一機、避退する気配もなくそのまま敵総指揮官機に激突した。一瞬ピカッと閃光を発し、B—24は片翼が折れてちぎれた。グルグルッと緩っくり回転しながら機首を下げて、あとはコマのように急回転しながらジャングルのなかに消えていった。内山中尉機は流れ星のごとく白い雲の彼方に去っていった。内山中尉と上島逞志中尉は兵七十二期の同期生である。私の隣の部屋にいたのでよく三人で語りあったものである。

今日の戦闘においては、敵にあたえた打撃も大きかったが、味方もまた隊長尾崎大尉

を失い、内山中尉の壮烈な戦死と数機の未帰還機を出した。祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり、盛者必滅会者定離の定めがまざまざと身に沁みるのであった。

飛行隊長林啓次郎大尉

尾崎大尉の戦死のあとを受けて林大尉が飛行隊長に就任される。三日か四日の間隔で来襲する敵機を邀撃するバリック戦闘機隊奮迅の闘いにより、製油所はほとんど無傷であったが、数回目の空襲の際、潤滑油工場が被弾、その黒煙は数千米の上空に達し数日燃え続けた。隊長林大尉の心痛察するに余りあり。多くの戦死者を出し、故郷の御両親の心中に思いを寄せて涙する。

その頃、比島方面に敵機動部隊の動きが活発化してきているという情報がはいってきた。昭和十九年十月（十四日頃と思う）夜半〇二〇〇頃、隊長林大尉以下飛行隊幹部は司令室に召集された。「ただ今戦闘六〇二飛行隊に比島マバラカット基地に進出せよ、との電報がはいった。直ちに行動を開始せよ」という命令である。黒沢飛行長は「零戦全機整備出来次第列戦をとれ。雷電全機（約十五機）は引きつづきバリックパパンの防衛にあたる。」このように命令された。時ならぬ全員非常呼集のラッパが吹き鳴らされ、中島司令の命令をうけた。全員はそれぞれの持場に走る。決戦の秋はいよいよ迫ってきているようである。

〇八〇〇四十余機の零戦は飛行長黒沢少佐指揮のもと、隊長林大尉に率いられて離陸、北の空の彼方へ消えていった。「服部分隊長!!バリックは頼んだよ。乾坤一番やってくる」という言葉のはしはしに決意のほどがうかがえた。木下、上島両分隊士等はこれでまた主戦場で戦えるということで大張り切りの様子であった。いくばくの隊員がまた、この地にもどってくるのであろうか。

一ヵ月余経過した十一月末、隊長林大尉は帰ってこられた。列機は半数以下になっていた。比島で同期の菅野直大尉に会い、彼がこんなことを話したということのなかに「神風特別攻撃隊のような死を決定された場合の隊員の統率は指揮官次第だ。男の死ぬ場所、死ぬ時間は神様しか知らんが、死に様は自分で決めることが出来る。しかし死ぬ場所と死ぬ日を決定された場合の死に様を自分で決める段になると、勇気がちょっといる。この心境が人間の究極のところで、死生の悟りのなか、淡々たる心境のなかに隊員を誘導してゆく不動磐石の姿勢が大切だ……」とあった。隊長林大尉の体験した、修羅場における身の処し方でもあったと思う。隊員一同死はもとより覚悟の上、死生観は確立していたが、死の命令についての実感はまだまだ少ないのであった。こうしたなかで、一人深く期するところをもって身辺の整理をされていたようである。あのはげしかった比島作戦終結のあとは、彼我しばしの一服状態である。ひき続きバリックを基地にして、ハルマヘラ諸島、南西諸島に行動する補給船団の護衛や、敵基地の攻撃にそれぞれ手分けして出かけた。

昭和二十年の新春を迎える

元旦の早朝〇六〇〇飛行場に全員整列し、中島司令の訓示と所信を聴く。宮城遥拝、英霊に黙禱を捧げる。零戦四十機、雷電十二機、計五十余機の大編隊をくんで新年の初飛行をおこなう。エンジンの音をごうごうと轟かせて大編隊は行く。航空隊の闘志は天をつく勢いだ。このようなショウも元旦にはよいものだ。真っ赤な太陽が海の彼方からぎらぎらと輝いて昇ってくる。祖国の正月のような気分には

とぼしいが、隊員達は上手に工夫して門松らしきものをたて、紙細工で鏡餅をつくり、結構それらしく演出している。凧揚げ、獨楽廻し等々、正月気分が盛り上る。今日は敵さんも偵察にはこない様子である。日没待機終了、新年の宴が始まる。それぞれに工夫し、各隊の宿舎は夜のふけるまで、大騒ぎが繰りひろげられている。

今年は、どのように戦局が展開されてゆくのであろうか。また誰が欠けてゆくのであろう。人事を尽くして天命を待つのみ。精神一到なにごとかならざらんやである。

一月二日〇九〇〇頃、初偵察のB—24一機飛来する。隊長機と久世二飛曹機がこれを補促攻撃し、敵機は一瞬にして猛火を吹いて墜落してしまう。幸先きのよい新年のスタートである。

一月末艦隊司令部より、敵の上陸に備え準備を早く完了するよう命令があり、航空隊も陸戦隊を組織し、塹壕ほりが開始された。戦闘作戦下令され、「敵軍上陸の場合は神風攻撃隊をもってこれを水際で撃滅すべし」との内容であった。

ちょうど飛行訓練中であったが、隊長林大尉は飛行作業の中止を命じた。隊員を集め、「比島作戦後敵の目標がどの方面に指向してくるのか、現段階で分からぬが、何時如何なる作戦命令を受けようとも、隊長を中心にして規律を守って命令に従うこと」を訓示した。

また私や木下、上島、上平、その他の分隊士を集めて、「明日からの飛行作業はやらない。待機は従来通りである。さらに一層の精神教育と、隊員との愛情をこめたコミュニケーションを深めよ」との指示があった。「隊員には早目々々に異常さを知らしめておく方がよい。突然明日神風特攻をやるといっても、覚悟はきまらんよ。時間の余裕を与えることは大切なことだ」という深謀遠慮の肚のなかを話された。

「われわれ幹部指揮官の心に迷いがあったら、ついてくる隊員は死にきれませんよ。私達が真っ先に突っ込むから安心して下さい」こんな会話のなかに安堵の色が見えたように思う。

戦塵の合間に行われたバレーボール大会、魚釣り、ジャングル探検等で、何時も先頭に立って企画し、リーダーシップをとっていた上島中尉、温厚で無口、そしてうちに烈々たる闘志を秘めた内山敬三郎中尉の顔、想いは尽きることがない。

第三四三航空隊へ

シンガポール、海南島、廈門、上海を経て大村基地についた。五月初旬頃である。

源田司令のところに着任の挨拶をする。司令は一番に「御苦労であった。頑張ってくれ」との激励の言葉であった。

当航空隊は長髪を許さないとの話である。理髪所に飛びこむ。飛行隊は戦闘四〇七(天誅組)で、林喜重大尉が飛行隊長でおられたが、戦死後その後任に林啓次郎大尉が就任し、私は分隊長に任命され、同行の隊員全員四〇七に着任した。

敵の沖縄進攻は激烈をきわめ、三四三空の各隊はこれに果敢に立ちむかった。

隊長林大尉は、七月二日、屋久島南西上空にて敵の戦闘機と空戦中未帰還となられた。約一年、共に行動し共に闘って来た。

彼は中学四年より兵学校に入学した頭脳明晰な俊才であった。深謀遠慮、眼の前の現実には極めて冷静で、いつもその前の手を打ってゆくというタイプで、指揮官としての魅力に溢れていた。

続く

ああ運命の九〇一海軍航空隊②

丙飛九期
元上飛曹　安倍　孫一

台湾危うし

私たちが東港に派遣されて以来台湾には大空襲はなく、B24の単機空襲が時々行われた程度であったが、一月九日敵はリンガエン湾に上陸、味方の必死の反撃も空なしく同二十二日遂にマニラが敵中に陥ちた。比島を足場にした敵は戦力を増強し、戦爆連合の大空襲をかけて来た。

一月〇日、戦爆連合の大編隊は東港、高雄、屏東の各軍事施設を襲った。その数約三百機、味方の邀撃戦闘機は一機も飛び立たなかった。戦闘機の温存を図ったのだ。大空一杯に群がる敵機は熾烈なる味方の対空砲火をくぐって弾雨を降りそそぐ。初めのうちはいたずらに地上に穴をあけ、砂塵を吹き上げるだけであったが、そのうち一機の投下した六十キロ爆弾二発が、庫外に退避中の二式飛行艇二機の直前に落下爆発し、二機とも機首を逆立てて大破した。その爆風で砂塵が私の頭上に降りかかった。私は防空壕に入らず戦闘状態を見ていた。戦に馴れてくると慢性になって怖くなかった。

味方の打ち上げる高射機関銃の曳光弾は敵機に命中して「く」の字型に跳ね返されている。しかし、同時装填の徹甲弾、普通弾、焼夷弾は貫通しているはずだが、敵機はそう簡単には墜ちない。

全弾投下した敵機は、今度は超低空で銃撃して来た。敵パイロットの顔が見える。味方地上砲火が必死で応戦、凄絶なる攻防戦が展開された。霰の如く飛来る敵弾の中を機銃隊指揮官は抜刀したまま身動きもせず指揮を執っている。その一機がパッと白煙を吐き他の一機が発火炎上した。いずれもグラマンであった。

「ヤッタ！」と歓声をあげた私の目の前で敵機は横すべりで消火し、二機とも白煙を引きながら南方海上に姿を消したが、多分比島までは帰投できないであろう。空襲一日目の我が九〇一空の戦果は、撃破逃走の二機と、構外高圧電線に接触して墜落したP38戦闘機一機で、損害は二式飛行艇大破二機に止まった。味方に死傷者なし。

この空襲は殆んど毎日のように繰り返され来襲時間もほぼ定まって午後三時頃が多かった。私たちはこれを敵さんの定期便と呼んでいたが、台湾全土の軍事施設の被害は暫時増大の一途を辿った。

折角修理した東港の格納庫の屋根はまたもや吹っ飛び、側面には大根おろしの如く穴があいたが、飛行機は一機も入れていない。零水は燃料を抜いて対岸に引込水路を掘って繋留して熱帯樹を覆っていたが、これも見破られて銃撃を受けて損傷したので、警戒警報が発令されれば安全な場所に空中退避して指揮官の指示を受けることになった。この空中退避は戦闘機を含む陸上機部隊もしていた様子で、初めのうち国民は邀撃戦に飛び立ったものと信じていたようだ。しかし、一回も空中戦を行わず、基地上空に在るのは総て敵機であることや、空襲警報解除後にいずこからとなく帰ってくる味方機に国民の不信は強まった。台湾ではこのように戦闘機を温存しなければ補給が続かないように窮地に追い込まれているのであろうか、一軍事施設に三百機を超す大空襲では小数の戦闘機では歯が立たないからであろう。

浴場も完全に吹き飛ばされ、ただコンクリートの浴槽だけが残った。鉄筋コンクリートの庁舎及兵舎の窓ガラスは、その殆んどが割れ落ちたが、不思議に兵舎は直撃弾は受け

なかった。破壊された格納庫の周辺には無数の六十キロ爆弾の穴があき、土のうを積んだ機銃陣地も吹き飛ばされて対空射撃員戦死、病舎も吹き飛ばされたので、東港の街にある家族が引揚げて空になった士官官舎を臨時に病舎に代用して病人及び負傷者を収容した。隣接する海軍航空廠からも黒煙が上がっている。

隊内のあちこちにタコ壺壕が掘ってあった。防空壕に入って見れば竹槍がギッシリ詰め込まれている。これを見た時、「ああ、この竹槍が帝国海軍最後の武器か」と心細い思いがした。

一月〇日B24の編隊が東港の上空を覆った。高々度であるから機銃は役に立たない。味方の打ち上げる高射砲が敵機付近で炸裂するが一発も命中しない。腹立たしく思っているとビュンビュンと風音を立てて小さな黒い異物が降ってきた。タコ壺壕から観ていた私は首をすくめた。パイナップル爆弾である。その数約二千発。瞬発信管をつけたこの一キロ爆弾は地上に直径三十センチの擂鉢状の穴をあけ、一個で数百の破片を飛ばす人畜殺傷用の爆弾であった。

木造家屋では屋根裏で爆発して破片が天井板を破って部屋の中で飛散していた。このため九〇一空及び海軍航空廠合わせて四百人を超す死傷者を出した。

一緒に大湊空から派遣された渋井一飛曹もこのため全身十数個所の破片を受けて病舎に収容された。彼は死ぬまで意識がハッキリしていて、「俺は特攻出撃まで絶対に死なんぞ」と繰り返していたが、翌朝帰らぬ人となった。

戦局挽回に期待

台湾全土の連日の空襲に邀撃戦闘機は一機も飛び立たない。戦局はいよいよ急を告げ、日本の不利は疑う余地がない、しかるに新聞の報ずる「我が方の損害軽微なり」にいささか疑問を抱いたが、台湾全土には、温存せる陸海軍の航空戦力はまだ実動機が一千機あるという。これを一挙に繰り出して反撃すれば、この難局を挽回できるものと私たちは固く信じていたのであるが、その反撃の時期はいつか。

九〇一空機能停止

比島が敵中に陥ちた後は船団護衛の必要がなくなったが、索敵は依然として続けられている。連日の戦爆連合の大空襲を受けながら、これをかわしての索敵行、台湾最南端ガランビ岬を起点として台湾沖を三百哩進出して五十哩変針し、又三百哩帰投する扇型飛行の索敵行、見えるものは海と空ばかり「敵影を発見せず」、索敵機の帰投と空襲が鉢合わせになり、東港を目の前にしながら空中戦が展開されて撃墜されたり、東港上空まで帰投して敵機と遭遇して、味方地上砲火の援護射撃の甲斐もなく隊員の眼の前で撃墜された零水もあった。敵機の定期便が狂い、隊と飛行機の連絡の不手際があった。下駄履機は敵戦闘機に対しては歯が立たなかった。

九〇一空傘下の各水上機基地も空襲を受け基地の維持が困難となり二月〇日、カムラン、アモイ、三亜、淡水各基地から本隊東港に撤退した。

（香港は直接博多空へ撤退）

比島救出の搭乗員を合わせると九〇一空は搭乗員は増えたが肝心の飛行機の補充が間に合わず、僅か十指に充たない零水を操作しての索敵行、しかし、この索敵も長くは続かなかった。未帰還機や空襲による機体の損傷で、補給機数が消耗数に間に合わず、一機の零水もなくなり九〇一空の機能は完全に停止し、派遣以来一隻の潜水艦も撃沈せず、三月〇日遂に九〇一空は索敵を断念した。その間九〇一空は対空射撃班は一機の敵機も

撃墜できなかった。

娑婆に未練が残れども

敵の夜間空襲に備えて夜間は隊外に待避することになった。隊門から余り遠くない、元東港空下士官の官舎が待避所に指定された。対空戦闘員以外の下士官兵は夕食後隊門を後にした。空屋になっているこの木造二軒長屋の官舎に泊まって「早く平和になって俺もこんな官舎で彼女と世帯を持ちたい」と娑婆への未練が残るが、戦局はそれを許さなかった。回天、蚊竜、及び陸軍の震洋も特攻の訓練を始めた様子、神風特別攻撃隊は既に出撃している。今後も続くという。飛行機の補充がつけばいつかは私たちも特攻出撃をせねばならないと覚悟を決めたのだ。大東亜戦争完遂という大の虫を生かすために、死なねばならない小の虫であった。私たち一人ひとりの命と引換に、この窮迫せる戦局を挽回できるのなら、笑って征かねばならないと、戒めと我が心に言い聞かせた。

死に勝る塹壕掘

航空隊の機能がなくなった九〇一空では、敵の上陸に備えて隊員は全力をあげて東港海岸線に塹壕掘を始めた。搭乗員も整備員も他の兵科と共に重労働を余儀なくされた。飛行機のない搭乗員や整備員は陸に上がったカッパに等しかった。三月の初めとはいえども南国の陽は暑い。かんかん照りの中での塹壕掘は死に勝る苦痛であった。馴れない重労働で足腰が痛む、全身から流れ出る汗で服はびしょ濡れ、額の汗は目に滲みる。この苦痛から逃れるために、敵弾に当って死んだ方がよいと思ったことが度々あった。空襲中だけが休憩の突貫工事だけに、あの忌まわしい空襲を心待ちにするようになった。極限におかれた人間の心理とでもいおうか、警戒警報が発令されると、隊員は一斉にバナナ畑や砂糖キビ畑に待避する。ここが唯一の憩の場所である。しかし、敵機は間もなく私たちが待避しているのを感知して、グラマン数機が低空で機銃掃射を浴びせて来た。敵機の進行方向に数米間隔に土煙が上がった。バナナの葉を貫いた敵機銃弾が畑の土に刺さったのだ。隊員には死傷者は出なかったが、空襲警報が解除されて塹壕掘現場まで歩いていると、バナナ畑で働いていた農夫が銃撃で倒れ、その傍で農夫の妻が冷たくなった夫の死骸に取りすがって号泣していた。何の罪もないこの農夫夫妻が可哀想でならなかった。あちこちに水牛の死骸が横たわっていた。もうバナナ畑も砂糖キビ畑も安全な待避場所ではなくなった。

塹壕掘を始めて暫く経った三月〇日、「搭乗員及び整備員は直ちに上海空へ派遣せよ」との下命があった。炎天下の塹壕掘の苦しみから開放された私たち九〇一空搭乗員は整備員と共に陸路基隆まで台湾縦断の汽車の旅をすることになった。基隆から上海までは海路で貨物船に便乗するという。

思えば昭和十九年十月二十四日、南方戦線の戦局挽回のために、大湊空から八機の零式水偵をもって二十四名の搭乗員が派遣され、船団護衛や索敵の任についたが、レイテ沖海戦の失敗で、不沈戦艦武蔵が沈み、現役空母の総て（四隻）を失い、そのあと敵は膨大な物量をもってレイテ島に上陸した。この時の攻防戦で日本の航空部隊は再起不能にまで損傷し、加えてその後の空襲で比島方面の日本の航空部隊が壊滅した。

制空権を完全に奪われ、悪戦苦闘の末九〇一空には一機の飛行機もなくなり、勇躍征途についた大湊空派遣隊の二十四名が、たった五ヶ月間で生存者が僅か八名になってし

まった。
いつかは大湊空へ帰ることが出来るであろうと期待していた一縷の望みも今は完全に消え果ててしまった。そしてこれから先、上海空までこの激しい空襲を切り抜けて無事到着することが出来るであろうか。一抹の不安を抱きながら足取りも重く、私達一行は東港駅へとむかった。戦いの空しさをかみしめながら…。
本稿を書くに当り、防衛庁戦史室に行って九〇一空の戦闘記録を探したが、残念ながら九〇一空の戦記は全くなく、ただ一冊の九〇一空日誌（昭和十九年八月～二十年三月）だけ残されていた。この日誌は飛行艇のものらしく、飛行艇による索敵や哨戒の記録が主で水偵班の詳細はつかめなかった。そのうえ空襲の状況も損害も全く記入していなかった。従って本稿にある月日について〇日とあるのは薄れかかった記憶と事実の月日に若干の食い違いがあると思われるので了承願いたい。

おわり

私は上海空→博多空→今宿水上機基地で終戦を迎えた。
敗戦のどさくさで敵の報復を恐れた九〇一空司令官は、戦闘の記録類を全部焼却させたと聞いたが、戦記が残されていないところをみると事実のようである。私の飛行記録も携帯履歴もその時幹部の手によって焼かれて今はない。ただ一冊残された九〇一空日誌も、海軍省の指示で後日思い出しながら再製したもののようでもあり、分隊日誌のようでもあった。その証拠として日誌には担当者の氏名と上官（分隊士以上）の印が全くなかった。

昭和十六年五月一日佐世保海兵団　丙飛九期、飛練二五期
偵
土浦、大井、新竹、鎮海、呉、大湊、九〇一空
元海軍上飛曹　安倍孫一
大正十二年三月十四日生

さらば予科練⑨

乙飛十九期　山田　稔

羽田の空
空襲下の飛練生活

四月の、ある晴れた日だった。
（正確には四月七日と言う）
空襲警報が発令されたのでフト西空を見ると、丁度、立川か調布のあたり銀色に輝くB29の一団が見えた。
と、その時、スーとそのうちの一機が脱落したとたん、キラ、キラと翼が胴体から離れ、やがてきりもみで落ちていった。
続いてまた、スーと一機。「やった、やった」今日の敵機は比較的に中空を飛んできたので（B29は大きいのでそう見えたが、実際は高い）高射砲がよく当たったと思ったがこれも違った。またも敵か味方迎撃機だろうか?。
二～三機煙を引いて落下していく。
この時の状況を、東京郊外高円寺の自宅近くで見ていた人がいた。河野百合子さんである。
長兄の敬は上智大学から学鷲を志願、震天制空隊員となり調布飛行場にいた。
日頃から信仰心の厚い彼はお題目を唱え、一切を日蓮上人にお任せして出陣すると、二月二十五日の手紙に書いていた。そしてこれが兄の最後の手紙となってしまった。
八日の夜、一通の電報が家の玄関に届けられた。
それは敬少尉がB29に体当たりして撃墜し、壮烈な戦死を遂げたとの連絡であった。
百合子さんは、私が見たと同じ「桜の花の散るように」仲の良かった兄の死、悲しくそして崇高な光景、最後の出合いが、今でも脳裏に焼き付いて忘れることができませんと語っている。

ちなみにこの日の迎撃で十八戦隊の小宅少尉は後方からのP51四機を認め、反転を、すればやられると判断、とっさに至近のB29に体当たりしたが幸運にも落下傘が開き生還した。

また、五式戦を駆って戦った平馬軍曹は第二撃をかけてB29に火を吐かせた後、重傷を負って力尽き、古利根川河川敷に不時着するものと思われたが水田に突入戦死した。この日の迎撃で日本側の損失は十一機とも十六機とも伝えられているが、B29は三機未帰還、六十九機損傷とありいかに戦闘が烈しかったかがわかる。

希しくも敬少尉（戦死後大尉）ではないが、日蓮上人の誕生日二月十六日に羽田（正式には霞ヶ浦海軍航空隊東京分遣隊、三月一日東京空となる）の門をくぐって憧れと、半分は緊張の飛練生活（飛練最後の期、その名も四十二期生）に入った私たちを待っていたのは空襲、また、空襲の明け暮れと言っても過言ではない。

二月十五日、待望の予科練卒業式を迎え、教官、教員、そして多くの後輩たちの「帽振れ」に送られて、やや夕闇迫る高茶屋駅から汽車に乗った。

駅のホームにはいつ、誰が割ったのか大きな菰樽の口が壊れ酒の匂いがプンプン。私は下戸だから興味なかったが柄杓でちょいと味見した者もいたと思う。とんだ退隊祝いである。

戦後、私は羽田に入ったのは三・四十名位と思っていたが、十九期の記録「蒼空賦」によればなんと六十七名（うち六月十日、土浦大空襲で六名が戦死した）ということで驚いたが、あの頃の記憶は自分に関連の範囲内、という良い例であろう。しかもここは陸上専修と言う。

ところが私の「履歴表」では〝水上班〟となっている。これは一体どうなっているのか？私の他に水上班員で羽田へ来た者はいるのだろうか？本来なら、水上班員は鹿島か北浦、第二河和空へ（それぞれ九十六名、九十八名、九十四名）この一員となっていた筈である。

卒業を前にして五つの飛練先が貼り出されたが、私は第一志望を「羽田」と書いて出した。私の故郷である埼玉に近い、そしてなんといっても花の東京、夢に見た東京、歌の文句ではないが〝パラダイス東京〟である。

二・三日して夜、私がトイレから戻って釣床（ハンモック）に入ろうとすると、近寄った班長（鶴巻教員）が「山田、お前は羽田だからな」と耳打ちした。

当時、私は班長係をしていたが、サボリマンなのでこれという事もしないのに、この好意。今でも只々感謝の言葉もない。生きておられたらせめてお礼の一言を言いたい。今でも切にそう思う。羽田に来られたことで、どんなに良かったか。

済まない。

済みません。

有難う班長。

不安と期待と緊張の飛練往き練習生を乗せて、夜汽車は東海道をひた走りに走ったが途中、早くも空襲警報で停車や徐行を繰り返した末、やっと蒲田から穴守稲荷線に乗り移り、羽田飛行場下車駅にはまだ二つ程ある処で、電車はガタンと止まってしまった。けたたましい空襲のサイレン「しようがないなあ、今頃来やがって」乗客は皆待避で何処かへ行ってしまった。私たちはかまわずそのまま電車に乗っていた。

突然！「ドドンドドドン」と高射砲が響く、スーイと黒い影が窓の外をよぎった。西カロリン諸島ウルシー環礁の泊地を抜錨した、米軍第五十八空母機動部隊は、この日早朝、東京の南東わずか二〇〇

kmの洋上から、硫黄島への攻撃と呼応し、関東地区の航空施設を制圧すべく、襲ってきたのである。

「いやー、着くそうそう、これじゃー先が思いやられるなあ」送ってきてくれた通称オジイチャンこと分隊長は絶句した。

オジイチャンはもちろん、私たちの前途、その先を心配したのであるが、同時に、これからの戦局の推移、日本の運命、そして自分を含む、急転する海軍の行き先を危惧したのである。

警報が解除され、電車を降りて、隊への道すがら飛行場を見ると、真っ黒な煙が立ちダグラスが燃えている。

（ちなみに、飛行場に対する空襲はこの一回きりで大森・蒲田の大空襲の折も、低空でB29が飛行場上空をかすめたが、一発の爆弾も焼夷弾も落とさなかった。）

空襲を受けなかった霞空と同じ、将来（占領後）の利用を見据えての措置ではなかっただろうか？

「隊門を入る時はダラダラするな。後でコッテリやられるからな」今まで聞いた飛練のしごきを想定し、緊張・疑念こもごも、しっかり歩調を取って隊門をくぐったが、何のクソ、空襲で隊内が騒然、私たちヒヨッコの入隊なんかかまっていられなかったのである。

甲十三期生、高塚篤氏の労大作「予科練・甲十三期生落日の栄光」の資料によると、ここ霞空・東京分遣隊の発足は意外と早く、昭和十六年十月一日であると言う。

当初は飛行学生の訓練基地であったようで、私達よりかなり以前、十九年七月二十五日、飛練四十期生として、小富士空より甲十三期生が八十四名、続いて既に霞空で訓練を受けていた同じく土空後期組（十八年十二月入隊）八十名が十一月三十日入隊していたという。

いたという極めて曖昧な表現で申し訳ないが、私は彼らと一度も接触した記憶がなく彼らが私達十九期生を避けたか？階級は飛長で同じだが、私達の方が麦飯の数では一年年長。

「第七駆逐隊海戦記」を書いた大高勇治氏は、海軍で最も厳しいものといえば、席順である。同じ階級でもその任官・入隊の日時が一日でも差があると、早い方に指揮権が持たされるので、食事の場合などでもこの先任権が非常にやかましく物をいうわけである。と書いている。

大高氏に態々労を煩わせなくとも、之が海軍のしきたり一本貫く規律の原則なのである。

ところがどうであろう。こともあろうにその不文律を海軍当局自ら破ったのである。所謂、甲・乙・丙予科練の名称制定である。「銀河」とか「白菊」とか更に「天山・月光」等という気品ある飛行機の名称を名付けた、当局とこれが同じとは到底考えられない暴挙である。

そもそもスタートラインが異なり、進級も違うグループを同名で片付け、然も同じ航空隊で育てた（後、昭和十九年三月、甲・乙航空隊に分けたがこんな茶番劇で片付く問題ではない）いかにも貧乏国が考えそうな、このことのため、どれだけ純真な若者を傷つけたことであろう。

通常、飛長には甲は約半年乙は二ヵ年かかる（その後若干変わる）昨日、今日入った事業服も体も貧弱な新入生が忽ち「おい敬礼せんか」ときたら、乙は頭にくる。

そして些細なことから両者入り乱れての乱闘騒ぎがしばしば発生したのである。

これらのことは、予科練を卒業して、飛練そして事もあろうに戦地でも発生したと言う。

「空母艦爆隊突撃記」の著者、水越少尉によれば、ある

夜数人の集団乱闘が起ったというので、甲板下士に調べさせたところ、原因は甲飛対乙飛の対立で、やはり先任・後任の争いであった。

私は一般兵出身（これも悪評プンプンの丙飛）なので仲介者として懇々と和を説いたので、その後争いも減じたがこの感情ばかりは完全に拭い去ることは出来なかったようであると書いている。

さすれば戦局にも大いに影響があったと言うべきである。随分罪なことをしたもので、海軍悪行の一つといえよう。

（他に精神棒・バッターがある。）

これは帆船時代のイギリスで奴隷船員に対する制裁をこともあろうに終戦まで海軍ではやっていた。

棒で叩くので兵は牛・馬扱い、陸軍ではスリッパで殴るので、さしずめ兵隊は蚊か蝿扱いである。

（続く）

この記事は、海原会懸賞文に応募された作品です。（事務局）

華々しき戦闘の蔭に

平山　幸夫

昭和十八年一月と言えば、米軍はソロモン諸島ガダルカナル島に強大な飛行場を整備して、反攻の一大拠点とするために航空兵力を増強しつ、あった。結果的にはマキン、タラワ、サイパン、テニアン、グアム、硫黄島、フィリッピン、沖縄の上陸を企図していただけに、その前段のソロモンの攻防は熾烈そのものであった。私の所属する八五一空飛行艇部隊は、ラバウルとガダルカナル島の、ほぼ中間に位置するボーゲンビルのショートランドに基地を設営して、連日ソロモン海周辺の索敵任務に従事していた。それは日出前に離水しての長時間の索敵行で、索敵線上では敵の大型機と、または機動部隊の小型機と交戦しては未帰還となる機の続出であった。当時我々の索敵機が敵艦隊を発見して海戦の端緒を作ったものに、大きなものとしては南太平洋海戦、第三次ソロモン海戦、レンネル島沖海戦等がある。敵は陸上基地を増強する反面、機動部隊をソロモン海に遊弋させては、日本艦隊を誘致して、一挙に勝敗を決せんものとしての作戦だったのである。水平線上に、敵の大艦隊の灰色のシルエットを発見したときの、極めて複雑な胸の騒ぎは、今も胸の中に生きている。索敵哨戒は通常三日に一回の割合で飛んでいたが、未帰還機が多くなり、兵力が減少すると、その負担は増大して、特に作戦が本格化すると、その作戦が終了するまで、あるいは自爆するまで連日の飛行が続く。一方ラバウルを始めとしてブカ、ブインに展開していた戦闘機隊は、ガダルの敵航空兵力の増大を阻止するために、連日ガダルに奇襲を掛け、空戦または地上掃射によるせん滅作戦を展開していた。我々はこれをガダルカナル航空撃滅戦と呼んでいた。十八年の一月二十六日、予定としては非番であったが、早朝の〇四〇〇（日本時間）「高橋飛曹長のペア（組）は零戦の不時着搭乗員救出の為、直ちに指揮所に整列。」と伝令が椰子林の中にあるテントに飛び込んできた。

心の準備ができてはいるが、物の準備に時間がかかる。不時着搭乗員の食料に衣服、医薬品、それにわれわれの朝食の準備をして指揮所に整列。飛行隊長池上力少佐の命を受ける。説明に依れば、前日の一月二十五日、第二五二空の零戦十八機は〇八〇〇ラバウル基地を発進してガダルに突入、攻撃終了後帰投中に被弾と天候不良のために六機不時着、一機行方不明となっている。十一機は一五一〇ブイン基地に帰着した。不時着機の中の一機がチョイセル島の東

端水道に不時着したことを僚機が確認している。ブイン基地に居る二五二空の零戦六機が、皆を護衛するので、直ちに現場に向かい、これを救出せよとのことである。機長の「掛かれ」の号令で、ゴム艇を利用して機上の人となる。エンジンを暖気して試運転の準備をしていると、六機編隊の零戦が高度百米で飛来、直上通過後、旋回して我々の離水を待っている。吉良正弘二飛曹は（四十九期操練）は、任せておけとばかり、試運転もそこそこに離水、針路を東に、針路〇八五度。飛行高度三百米。護衛の零戦隊は我が大艇の後方百米、上方両側に三機ずつの編隊でついてはいるが、速度の相違から大艇との編隊は困難らしく、高度を上げたり下げたり、蛇行したりしている。高橋幸蔵機長（六志偵練）は増速を命じ計器速度百二十五ノット、一路チョイセル島へ。

天候晴。視界十浬。我々は連日、この周辺を飛び、敵機との交戦を経験し、神経を尖らせているが今日は六機の零戦の直接掩護であるので、何ら不安はない。チョイセル島上空到着後、海岸線に沿い丹念に索敵しながら二十分近く飛んだ時、直掩機の隊長が、後方から我が艇の左翼単まで近接してきた。飛行帽で顔形は不明瞭だが、左腕の階級マークは大尉だ。多分分隊長であらうと思ったとき、分隊長は左手を上げたかと思ふと、左後下方へ、急速降下反転していった。我々は大型機で軽快な運動は出来ないが、「よしきた。」とばかり大きく旋回して分隊長機に続き、地上の不時着乗員を探した。既に機体は水没して、その姿はなく、海岸で手を打ち振る一人の乗員を発見した。大艇は一旋回して、風に立ち着水、水道に入っていく。不時着時、負傷でもしたのか、さっそく興奮した鱶の大群の示威運動である。水の中の物体は大きく見えるものだがそれでも三、四米はあるだろう。どう猛そのものの鱶が我が艇を取り巻く形で、青色い腹部を見せ乍ら遊弋する様は映画以上だ。南洋の海は綺麗なのでそれが良く見える。転覆でもさせられたらと、幾らか気味が悪くなってきたので、「機長、ぶっ放しますか」と七ミリ七機銃の射撃を要請したところ、機長は、「止めとけ、後が大変だ」と先を読んでの制止であった。内側の二つのエンジンを止め、外側のエンジンスイッチを断続したら、低速で水深を警戒しながらの水上滑走である。不時着乗員に一番接近した処で投錨、エンジン停止。梯子を掛けて翼に上がり、翼端へ急ぐ。翼幅が四十米の大艇であるから二十米近づいたことになる。不時着乗員との距離は約十米。救命ブイに、ロープを付けて投げたのであるが五米も届かない。「飛込んでつかまれ。」とメガホンで叫ぶが、ちゅうちょするばかりでなかなか飛込まない。鱶が暴れているので、どうにもならないのである。その時、単機で救助を見守っていた分隊長機が急降下して来て、七ミリ七によって海面の機銃掃射を実施した。不時着乗員と、翼状の私達の距離は約十米で、その射撃は極めて危険なものであったがその意図は理解できた。不時着乗員は紫のマフラーを腰に垂し、自分の拳銃で、七発の弾を海面に乱射して飛び込んだ。だが然し、ジャケット（救命衿）を付けているので、浮くには浮くが、前進は仲々困難である。懸命に力泳して、やっとのことでブイにつかまることができたので、我々はロープをリレーして、艇の後部昇降口へ引き寄せ、艇内に抱え上げることができた。「良かった、良かった。もう大丈夫だ。」「有難うございます。」の感激の言葉の中に、衣服を交換し、湯水や食料を与え、後部の寝台で休むよう指示し

て我々は帰投の準備に掛る。水道が狭いので五、六名の者が左翼端上に集合して、艇を傾け、右エンジンを起動して、その場回頭である。錨を上げ、全員艇内に入り、配置に着く。各配置から「離水準備宜し。」の報告を受けて、高橋機長の「離水」の令。洋上へ出て、離水直後、私は後部機体右側に強烈な衝撃を受けたので、てっきり味方うちかと思い、電信席の窓から外を覗いたところ、そこには胴体の星のマークも鮮やかな敵二番機の、翼前縁の十三ミリ機銃が、両舷から火を吹いていた。続く

雄翔館見学者所感

コロナ禍もあり、約3年ぶりに来館しました。旧日本軍、旧海軍の戦事品遺品には言葉にできない思いが募ります。

千葉市の実家旧海軍の遺品があります。展示して頂くことはできますか？

令和四年九月
市原市　大塚様

自分の子供と思うと、本当に心が苦しくなります。日本国の為にささげた思いの清らかさに感動いたします。

とても素晴らしい体験ができました。ありがとうございます。

令和四年九月
大田区　桑山様

子供が現在隊の方でお世話になっております。今回こちらで見た事が子供と重なってしまい、とても切なく思います。二度とあってはいけない事だと思います。

ここへ来られて良かったです。

令和四年九月
君津市　無記名（49歳）

自分と年が変わらない若い者が日本の国の為に戦った事を深く知れて、とても良い見学ができたと思えた。今、私達が平和にいられる事は、この方々の命をかけて行った任務のおかげなんだと思いました。私も国のために、この人たちのように命をかけて防衛任務をできればなと思います。

令和四年九月
小美玉市　目良様（21歳）

私自身中学生のころに学習した太平洋戦争の分野において、大変な興味を持っています。それは高校生になった今でも変わらず、自分で戦争に関する動画をYou Tubeで視聴したり、戦争関連の本を集めて読んでみたりと、日常生活において様々な影響を及ぼしています。その為に今回、この記念館を訪れることになった訳ですが、私にとって非常に光栄な体験となりました。今現在、私たちの代で戦争を知る人達はほとんどいませんし、戦没者の方たちの多くは不必要な死であったと考える人も多くいます。しかし私は、戦争で亡くなられた方々の上に私たちの平和な人生があることを忘れてはならないと思っていますし、その犠牲は必要なものだと思っています。亡くなった人達が、自分の命をかけてまで守ってくれなければ、今の日本は外れ者のままで馬鹿にされたままでした。身をささげ、守ってくれた日本を、これからも私は永久に守っていきたい所存であります。

令和四年九月
つくば市　遠藤様（16歳）

予科練記念館を見学させていただいて、今の日本は多くの人々が戦ってくれたからあるんだと思えました。いつも日常通りに生活していて、今までは何にも思いませんでしたが、今日ここに来て、若い年で亡くなった人もたくさんいるんだなと思いました。遺書や遺品を見て自分の命より国のために戦っていてすごいと思いました。

「永久にさようなら」とあって、もっと家族との思い出や

家族と会いたかったんだろうなと当時のその方たちの想いを想像するとすごく切ないです。

これからは、国のために戦ってくれた人たちのおかげで現在の日本があることを忘れずに、毎日を過ごしていきたいです。

令和四年九月
つくば市　遠藤様（13歳）

4月に阿見に引っ越してきました。今日覚悟して入館しましたが、やはり涙が止まりません。終戦を5歳で迎えこの年迄生きてこられたのはここに眠る多くの若いいのちのお陰だと唯々感謝の気持ちでいっぱいです。残された短い時間を大切にしたいと思います。今日は初めてですが又逢いに来ます。
本当に若く苦しかったことでしょう。ゴメンナサイ。

令和四年九月（住所記載なし）
木村様（82歳）

有難う御座居ました。心を静める為大変安らかな気持ちになりました。　で　10代20代では何とも悲しい出来事でした。国は愛すれども国家は敵!!

令和四年九月
茂原市　山口様（67歳）

去る九月に自衛隊を定年退職しました。ここへ来て改めて40年余りの自衛隊生活が平和な時代であった幸運をかみしめています。日本だけでなく、勝ったアメリカにも多くの悲劇があったでしょう。日本がこれからも平和であること、そして世界から戦争がなくなることをいのっています。

令和四年十月
住所氏名記入なし（56歳）

戦争を知らない若い世代の人にも見ていただきたいと思います。学校の教育でここに来ることはあるのでしょうか。

令和四年十月
千葉県（無記名）様

小2の息子がゼロ戦に興味を持ち　連れてきました。男の子ですので戦いや武器などには小さな頃から興味をもちあこがれも抱いています。なんとも男の子らしい息子です。親としては興味・関心を伸ばし、成長を見守りつづけたいと思う一方で物事の成り立ちやその成すべき姿をきちんと伝えていく責任があると常に感じています。何事も良し悪し、白や黒、0や1では決められないのが社会であり、より世界は先の見えない時代に来ています。真実から学び考え行動する力が求められます。今日はよい学習の機会となりました。ありがとうございます。

（時期・住所・氏名の記載なし）

本日はほんとうに有りがとう御在いました。7年前に亡くなった妻の実家（島根県松江市内）の妻の母の弟が予科練生で昭和二十年四月七日、九州のキカイ島で米機と交戦・被弾し戦死しました。その名は谷川たかお。その弟が松江市内で教職員を定年後、たかお記を本にして親戚一同、知人に配りました。靖国神社にはたかお氏の遺品等しばらく展示してました。私も何回か神奈川県に住んでいた頃拝見に行きました。今はこの土浦の地で一人生活で余生を頑張っております。本日感無量で帰ります。日本国の為にありがとう御在ました。以上

令和四年十月
土浦市　木曽様（80歳）

現在も尚ロシアで戦争が続いています。二度と戦争をしてはならない教訓が伝わっていない悲しみを覚えます。どの戦いも若い世代が犠牲になっています。

令和四年十月
藤沢市　加藤様（47歳）

私は戦争と言うものを知らない人間です。国の為に戦って若い人たちが　涙が出る思いです。戦争はないのが一番ですね。感動しました。

令和四年十月
熊谷市　吉田様（６０歳）

感想に替えて
肩を組む
予科練像や
鰯雲

令和四年九月
結城市　氏家様

阿見のイメージがすごくかわりました。　若者にもっと見てほしいですネ、今、ロシア、ウクライナ戦争に……
（時期・氏名記載なし）

As aTaiwanese, I knew that war brought Japan and Taiwan together since 1945, and cepareated two places once 1945.
The once nationals now become alien, even enemy in official negative, it,s hard to justify the correctness of suth history, but we cant only prevent such things true happry again.

令和四年十月
つくば市　頼様（２１歳）

（事務局で意訳を試みてみました。文字不鮮明などのため誤訳をしていたらご容赦下さい。）

１９４５年以前に日本と台湾は一緒に戦っていた、そして１９４５年以来二つの地域に分かれたということを台湾人の私は知っています。
一旦異邦となった上は、たとえ政治的に対立関係にあるとしてもその様な歴史を裁くのは難しいが、我々はそれらのことを円満に乗り越えることができるのではないか。

（公財）海原会寄付者芳名簿
（敬称略）（単位千円）

令和四年十一月より
一　堀越　雅子（甲13遺）東京
一〇　米倉　禮子（乙4遺）神奈川
一〇　谷口　繁（乙20）埼玉
三〇　近藤　新市（非会員）愛知
五　鬼束　辰巳（乙21）静岡
五　出口　一徳（特4）山口
五　谷川　論（丙2）長崎
五　為平　浩一（一般）兵庫
五　水本　滋信（乙23）兵庫
二〇　冨澤奈津子（一般）山形
五　小野　武昭（甲14）佐賀
五　鈴木陽一郎（一般）長崎
五十万円
多々野　弘（一般）香川

海原会へのご芳志
誠に有難うございました。

事務局日誌

十二月
十三日
筑波海軍航空隊記念館訪問
於　筑波空記念館
平野理事が筑波空記念館金澤館長と意見交換
十四日
会員来所
於　事務局
会員の佐藤誠子様が事務局を表敬訪問された。
甲飛十四期生戸張礼記氏が同伴
十七日
理事会
於　事務局
安井理事長、酒井・星指副理事長、平野・篠田・湯原・山下理事、豊岡監事が出席、保坂理事がZOOMで参加
理事会終了後に参加者全員で茶話会を行った。
二十三日
三者連絡会
於　事務局
予科練平和記念館、阿見町観光ガイド、海原会による三者連絡会を開催
平野事務局長が参加
二十八日
御用納め

「予科練」第475号3・4月号
昭和53年7月26日第3種郵便物認可（隔月奇数月1回1日発行）
令和5年3月1日発行
編集人　保坂俊雄
発行人　安井　剛
発行所　〒300-0301
茨城県稲敷郡阿見町青宿489番地1（慎輝ビル3階）
公益財団法人　海原会
郵便振替　00140-9-54332
FAX☎〇〇二九-八八六-五四〇〇二九-八八六-六四〇〇
定価500円

海原会会員の皆様へ

小さくてもあたたかい
一日葬
家族葬

お客様満足度 99%※
※当社施行客アンケート調べ

自宅葬、一日葬、お別れ会のほか、ご希望に合わせたお葬式プランがございます。

お葬式のご依頼や「もしものとき」に備えた事前のご相談
年中無休で承ります

相談 見積 無料

新型コロナウイルス感染拡大防止に万全を期しています。

お墓
お墓のことなら何でもご相談ください。墓石工事は信頼の10年間の保証書付きです。

墓所工事
標準価格（10万円以上）の
10%割引
サービス提供エリア：関東・関西・東海

「お墓のお引越しガイド＆事例集」
無料で資料を差し上げます。

お葬式
葬儀一式をセット化した「葬儀式セットプラン」を各種ご用意。最適なプランをお選びいただけます。

葬儀
祭壇標準価格の
20%割引
※一部斎場、一部商品は除く。新花で送る家族葬は優待料金
サービス提供エリア：関東

「お葬式の流れがわかる100項目」
無料で資料を差し上げます。

お仏壇
仏壇店は首都圏に2店舗（国分寺・千葉）。伝統型仏壇や家具調仏壇、手元供養商品まで豊富な品揃えです。

仏壇
店頭価格の
25%割引
※ただし、催事特価品と仏具小物、手元供養商品は対象外
サービス提供エリア：関東

「お仏壇カタログ」
「特選 お位牌」
無料で資料を差し上げます。

お問い合わせは海原会事務局へ 029-886-5400
お問合せの際は、「予科練を見た」とお申し出ください。

MAO MEMORIAL ART OHNOYA
メモリアルアートの大野屋
http://www.ohnoya.co.jp